

ギブスン『ヴァーチャルライト』論

樋口 日出雄

さて、次のような作品内容のシラバスを見せられた場合、読者はどのように対応するだろうか。

——カレンダーは2005年を標示する。

Nocal/Socal という姉妹州（かつてカリフォルニアとよばれた）を申し立てる不安気な文字遣い。Nocal！なにしろ千年王国の世が改まって、呆然とした州民だけが、その跡にとり付いているありさまだ。ロサンジェルスでは Berry Rydell が武力鎮圧隊員から転じて、賞金稼ぎのために一肌脱ごうというのだ。Chevette Washington はバイクメッセンジャーとなっているが、一時の気の迷いからスリを働き、相手から変りばえのしないサングラスをふんだくる。ところがこれが一風変わったブツ。人を金回りがよい状態に変えるかと思うと、あの世へ送り込んだりもする。

さて、Rydell と Chevette の二人は DatAmerica（誰に頼まれたわけでもないのに、ここのデジタル回路に侵入して情報さえとれば、最高のいい気分になれる）をひたと見詰めて、今や走行中である。それに一念岩をも通すというではないか。¹⁾

——少し筆者の脚色もまぎれこんでいるが、これが A Seal Book 版 *Virtual Light* の裏表紙に書き込まれた宣伝コピーの日本語訳である。作者はサイバー・パンク SF を立て続けに発表しているウィリアム・ギブスンである。包装物を差し引いた実際風袋を示すに、このシラバスは簡にして要を得たものであるといえよう。

迂遠と思われようと、包装物をほぐすあたりから作品に立ち入ることと

したい。ミサイル爆弾が炸裂する物情騒然たる時代。海外を飛び回り席の温まる暇もない運び屋 (curier) であることに半ば嫌気がさしている人物がいる。内向する思いを晴らしてくれるのは、アルコールとホテルにあるアダルト・ビデオのチャンネルに限られ、混迷のうちに客の配送荷物に手をつけたのは、メキシコ・シティにおいてであった。ヴァーチャル・リアリティ (以下 VR) のサングラスがそれであって、彼はまだその価値を知らない。

異国の地サンフランシスコで出会ったレトロ調の女シベット (Chevette) は、自転車を操つるためボンテージ・ファッションに近いで立ちに、髪を日本のレスラー風にまとめている。これでは自分と同業の配達業にたずさわっているとは俄には信じがたい思いであった。配達中あるホテルのパーティに潜入したシベットは、この同業者より VR サングラスを抜き取り、そのフロアの警備チェックを等閑にして何食わぬ顔をきめこんでしまう。

アメリカ (カナダ在住ではあるが) のすぐれた現代作家ダグラス・クーブランド (Douglas Coupland) は、彼の作品『ジェネレーション X』(1991) の中で、「生身で生きている存在を、ブルジョワ的ユダヤ=キリスト教的倫理態度をもつアニメ・キャラクターへと、頭の中で変換してしまうこと」を目して「バンビ化」と名付けている。ギブスは逆バンビ化ともいえる状況をこのハイテクの VR サングラス (この中にサンフランシスコ再建の仕様書が見える仕かけがある) をめぐる争いに見ている。

コスタリカに帰化したヴァルカン半島人が、サンフランシスコで何者かに殺される。その人物の喉にアダルトビデオの一片らしき異物 (chip) があることを検死した上で、それが McDonna というよび名のものであると特定するのは、IntenSecure (シラバスにいう DatAmerica と同等) のレンタコップたちである。実はこの死体はシベットによって、VR サングラスを抜き取られたシベットの同業者当人のものである。異物の挿入は司法解剖の前に行なわれたと思われる。(…But before they cut him… P. 123)²⁾

メキシコ・シティにおいて、たしかに当人はホテルのビデオデッキから

流れるポルノに目をやっているからには、90年代をときめくポルノ女優マドンナ (Madonna) を諷した McDonna という名のビデオが彼の身近にあっても不思議ではないのである。ただ司法解剖以前に異物^{しづもの}というか、McDonna という名の代物の挿入が行なわれたとするなら、その犯人は誰かという問題は残る。犯人は誰にせよ、その人物はマドンナというすぐれてバンビ化現象に棹さす源氏名をもつ女優を、ハイパーテキスト化し

Madonna	→	McDonna
(ユダヤ・キリスト教 でいう聖母)		(donna はイタリアで いう貴婦人)

髪をブロンドに染めあげ、イタリア系の身許を隠すことに疑念を投げかけているのである。マドンナがテキストとして流通するや、ハイパーテキストの段階で McDonna として再現されるのである。

同様にして、IntenSecure は現代英語にいう Intensive-care-unit のハイパーテキスト化された読み換え、DatAmerica は datamation (データ処理) のハイパーテキスト化で DatAmation から変換されたものであろう。

I

異物を濃淡をつけてX線撮映したものを目して McDonna とする IntenSecure の親分格 Warbaby 一味の知見は、かなりのハイテクを駆使したものであるといえよう。作中で人物名を固有名として使うことでは、日本人赤瀬川原平の考案になるトマソン (Thomasson) と共通点があり、これも都会の景色のなかに異物を見出し「路上観察」と称して写真に残したいきさつがある。トマソンは日本野球の一球団にメジャー・リーグから助っ人に馳せ参じたプレーヤーであったが、打棒が振わず、マスメディアではこれを諷してトマソンは大損であると評したことがある。

本篇の中では、大阪大学の研究室から震災後のサンフランシスコに赴い

た日本人にして文化人類学専攻のヤマザキによって、トマソンの存在である旧ベイ・ブリッジの橋詰めに住むスキナーという老人が見出され、彼自身もその部屋に住込むことになる。この老人の部屋を含む一帯が、一種の囲いこまれたコロニーであり、アフリカーナ（アメリカ在住の黒人）である Warbaby によると悪魔主義者の巣窟であり、レトロウィルスによる病疾であるエイズに殉教したロック歌手シェプリーを担いでいる葬送の場でもある。

トマソンが路上観察芸術と化してゆく日本の芸術シーンとひきくらべてみると、サンフランシスコの路上は観察などというやわな視線を許さない。勢いのおもむくところ、スキナーの部屋の付近で、ペニスに鉄の棒を通した人物が他殺体で見つかることになる。「トマソン」に対峙するに、鉄入りの「ジョンソン（ペニスの俗語）」という一幅対さえ成立する始末である。

スキナーの部屋は、警察当局に知られてはならない禁断の品物の収蔵庫ともなっていたのではないか。シベットが盗んだ VR サングラスを持ち込んだのは、その住人であるから当然としても、シベットが留守となつてからもヤマザキのもとに託されてくるのが「トマソン」としての出所不明のピストルであるのも、このような文脈で理解できるのである。ヤマザキの感想の中に「サンフランシスコはトマソン、いやアメリカ全土がトマソン」とする一節がある。サンフランシスコ市内を疾走するシベットのバイクや、ジャンクを室内に貯めこんでおいて下のデッキ（橋の下層桁というべきか）に店を張っている商人に何がしかの代金を支払わせ、ジャンクの処分を繰返すスキナーの部屋はひとつのコロニーの当主となっているといえるのである。

トマソンへの萌芽を内に秘めながらも、シベットの場合は一種の養子として、スキナーの場合はケーブル・タワーの上の狭い空間に閉じこめられた当主として、それぞれにサンフランシスコ、アメリカ全土を足下にとらえ、肉体でもってそのトマソン性を超えようとの志向に支えられているとはいえよう。スキナーのもとにかけつけ、交互にこの当主の面倒を見るべく起居をともにするシベットとヤマザキは、トマソンからの超越の志向が

うかがえる土地として対岸のオークランドを考えていた節がある。地理に
関して篤学の風のあるスキナーは、大学の自由な時間を抛ってまでその識
見を慕って自分の部屋に押しかけてきたヤマザキが、反トマソン志向のあ
りかとしてオークランドを注目していたことを知っていたであろうか。先
にふれたトマソンの存在としてのピストルにしても、オークランドの住人
からヤマザキのもとに託されるのもストーリーに複雑な脚光を浴びせてい
る。

II

シベットの友人でバイク・ショップを経営する Nigel は、Oakland を目
して Oak を省略して 'Land というのを常としたが、かつて G・スタインは
同地を目して「そもそもそこにはそもそもがない」(There's no there
there.) という名文句を残している。ところで Oakland に寄せる思いのた
けをみるに、シベットとヤマザキの両者間に差があるのではないか。

学生であるヤマザキには当然大学に縁を食むことに執着であろう。彼に
は Oakland という「新しいものの心臓」をさぐろうとする気持ちがあり、
トマソンが重ねられた形で山をなしているスキナーの部屋への敬慕だけに、
必ずしも一重につながっているのではないことも事実であろう。ヤマザキ
の志向は「途中から／いきなり核心へ」(*in medias res*) であり、彼の
Notebook (携帯型パソコン) が写し取る情報もこれと無縁ではない。

心臓といえば血液のポンプであり、ヤマザキはスキナーの部屋の水や液
体燃料をポンプ・アップする役に回る。浮世の俗用としては、心臓もポン
プとしての操作だけに向くのであろうが、彼が心のメッセージを託すのは、
身近に携行する Notebook であり、それは瞬時にして彼の基地である大阪
大学の受信機と通信を交わすことが約束されているのである。スキナーの
談としてこの Notebook に納まるのは――

我々は2000年というゴールに滑りこもうとしたのさ。麻薬は所をかえ

てはがらりと姿をかえる。ヨーロッパは内戦をもちこし、AIDSは放置されたままという始末さ。³⁾

——のような通信文である。しかし通信文を綴る彼の側に、ものぐるおしいメランコリーが無いといえば嘘になろう。そのメランコリーの存続は、エイズという病いに倒れたシェプリーというもとロック歌手のリソグラフを担いでいるグループへの執着にも見られるところであり、普通のマス・メディアでは手つかずのまま残っている情報を、深層に埋もれたままにはしておかない暗いメランコリックな感覚で収集しようとするのである。

ヤマザキがコンピューター型 Notebook を開いているところを不意打ちした Loveless とよばれる殺し屋は、スキナーの部屋にヤマザキを伴って現われ、銃で制圧しつつヤマザキとスキナーの両人を接着剤で手かせ足かせを作って自由を奪い、あわせてシベットの両手を前で組ませてこれも手かせをかけて連れ去る。

しかしこの実行犯は必要以上に内情を明かすので、Warbaby から派遣されたこの人物が、サングラスを運ぶ「運び屋」の監視を任された上、「運び屋」がサングラスを盗まれ何者かに殺害されて以後、そのサングラスの行方を追っていることも次第に明らかとなる。彼は「運び屋を子飼いとしてしまえば、もうびくともするもんじゃない」といい、さらにシベットに向かい「サンフランシスコ市内で会社から託された書類を運ぼうとも、こやつは運び屋だ」ともいう。

運び屋を扱うには買収してしまえばこちらのものだという口ぶりがうかがえる一節だが、シベットはなかなか口を割らずサングラスの行方は不明のままである。

サンフランシスコで IntenSecure に囚われの身になったことはシベットにとって幸いであった。壘壁のごとき警護の列に自転車を操って割って入ったのは Nigel である。隙をみて手かせで数珠繋ぎとなっていた Rydell とシベットは Warbaby の車を奪い逃走する。その車にも追手が迫る事態があれば、一刻も早く手離さなければならない。

他人に見られることなく自己の閱歴を相手に伝えるためにも、身を隠す

ように入った一軒の店では、イレズミの見本をスライドで見るうちに互いの身の上が語られてゆく。シベットが Republic of Desire という組織を友人ローウェルにからめて説明している途次、ライデルは上の空の状態ですライドから写し出されたエイズの病歴をもつ Shapely のイレズミを胸に彫った瘦身の男を目にする。その悲嘆にくれた姿を認めながらライデルは、悲嘆だけなら胸毛を盛大に生やし目を覆わせるほどに肥大化させても、ことはさらに盛り上がること必至であると思う。これはのちにライデルが Republic of Desire とハイテク VR を通じて連絡をとり、通信ディスプレイの上で相手の姿を認めるがその像のうちに、Blood Indian の直系を名乗る God-eater という山岳の姿に似たものがあることに脈を通じていよう。

ディスプレイ上に写ったその像には頁岩の山にそびえる変装用カツラがこれ見よがせに映っていたのである。要するに、native American は得手勝手にアメリカ全土の自然破壊の反対者を代表しても自由であり、肥大化した山腹や巨大化した毛髪のカツラはそのシムボルであるという越権思想が透けて見えるのである。たしかにインディアンにとってアメリカ全土が怨念に彩られた空間であるとしても、人しれずエイズで死亡した患者にとって世間から一步退いた悲しみがあろうと、両者の思惑を越えたところに、シベットとライデルは逃走先を求めてゆかざるを得ない。

III

ロス・サンフランシスコ間を往復することになるエリオット夫人は、サンフランシスコには空路到着したものの復路にはレンタカーを利用しロスへ帰投する。空の旅をエリオット夫人と隣り合わせの席で伴にしたライデルは、夫人がレンタカーを運転することにおいて地理に不案内であることを利用して、シベットをナビゲーターとして乗り組ませ三人の旅が始まる。

エリオット夫人の用向きで立ち寄ったロスで起きる事件に立入る前に、用向きとしてはあくまで緊急避難にすぎなかったイレズミ店で、ライデルとシベットの二人が見たスクリーン上の映像について次の二点では押え

ておきたい。

(1) [Rydell saw] [S]kinny guy there with J. D. Shapely all mournful on his chest.

(2) But you'd be mournful, too, you had chest hair growing out on your eyes.⁴⁾

(1) についていえることといえば、チェストという身体の部位はバイクに置きかえると、ガソリンの貯えられたタンクであり、この鋼鉄の容器を子宮に、それにまたがったライダーを精子に見立てることは容易であろう。しかしそれにしては Shapely 自身がエイズの犠牲者であるということは、何とも皮肉である。これは Shapely のモデルが E・プレスリーであり、映画「ワイルド・アト・ハート」(1990: 監督 Dリンチ) でスラッシュ・メタル・バンド「スローターハウス」の演奏でプレスリーのナンバーを歌ったのが主人公セイラーであったことを思い出すだけで充分であろう。つまりバイク集団の美学の化身であるヘルス・エンジェルスの美学に殉ずるのがセイラーであったことは間ちがいのない事実であり、ライデルもバイクライダーのシベットを同伴していることで、このライダー感覚に浸っている。

(2) については――

両眼から胸毛を生やすことは日常的には不可能であるが、スプラッターとよばれる映画では可能である。

榎木野衣によれば、⁵⁾ヘヴィ・メタルの美学は、70年代のこれらの一連のダーク・ロックに端を発し、モーター・サイクル的で暴力的なスピードマニア性を一気に増大させ、80年代後半には、「フラッシュ・メタル」という新規のスタイルを獲得する。スプラッシュ・メタルはヘヴィ・メタルのサウンド・スタイルを極度にスピード・アップしたもので、ドラ

ムス、ギター、ベース、ヴォーカルの個々のインストゥルメンツは、そのそれぞれがパルス状の肉片と化すまで分子状に分解される。つまりライデルは、サウンドならぬ光学的映像のスプラッター状態に身をさらしているのである。

——(1)と(2)を「正」と「異」さながらに並び立つものとして把えること。因果律を無視した表裏一体。言葉の正確な意味で、これらを「組織／作曲」して一篇の作品に仕あげるギブスの技法は、作者自身の原風景に根ざしているのか。それとも作品という巨大な舞台で、作者はひとり何かの楽器を手に、パンク音楽のように音を空間的に敷き詰め、折り重ね、更にその上から音を冠せているのではないか。さながらあのトマソンのように。

サンフランシスコが、いやアメリカ全土がトマソンであるというとき、作家としての資質にかけてギブスはしたたかに苦い思いで言葉という音を、作品に冠せ続けていたはずである。このイレズミ店でのフリーク（畸型）に示されるのもまた例外ではない。

IV

日本からニューヨークのミュージックシーンに参入すべくレコード製作に出向いた日本人バンド YMO に、コンセプトを提供したのは、ギブスであり彼はそのためこの作品『ヴァーチャル・ライト』の一節をファクシミリで送付したという。YMO がギブスから送付された手紙文の一節を利用しつつ、レコード製作にコンポーズしたことは YMO 資料集『テクノドン』に証言がある。

その後 YMO のメンバーのひとり坂本龍一は、日本人コメディアン・コンビのダウタウンを起用してアルバム「ゲイシャガールズ」をプロデュースしている。その名も Cognitive Dissident というサンフランシスコの店が、ギブスの *Virtual Light* にも顔を出し、そこでアトラクションのひとつとして日本娘をホログラフで投射しているシーンがあることと暗黙の符

合があるというべきか。

浩然の気を養うはずの店内の空気が、日本娘のホログラフ・ショーのように危うい均衡のあやつりに支配された Dissident (御幣担ぎ) の VR 化に満たされていることは、この店の名の頭文字だけを取れば CD となることに明白であろう。CD とはレコード業界にいうところの音と映像の凝縮されたソフトを指すのである。

CD という店は何者かへ向けたオマージュのようにみえて、その実店内では日本娘のホログラフを客寄せに使い、爆弾がはじけるような人を失神させかねないテクノ音楽の音響のもとで、ありもしない現実を人にあるかのように見せかけているのである。客を引きつける算段に気を取られているうちに、荒っぽい客であるロシア人の殺し屋 (警官のバッヂはもっている) が侵入し、ライデル (これもバッヂはあるが、今は Warbaby のお抱え運転手) とともにシベットを拉致するに至る。これでは CD を Cognitive Dissonance (心的葛藤) とでも店名を変えた方が商慣行にも合致するであろう。

冒頭のシラバスに移って――

Now Berry and Chevette are on the run, zeroing in on the digitalized heart of DatAmerica, where *pure information is the greatest high*.

斜体部は麻薬と情報との分割できない関係を明察し、不純物やノイズの無いものほど上物 (high) となるという事情を示している。シベットの友人ローウェルが麻薬を扱かい同時に、デジタルな情報の中心部 (DatAmerica) にコネをもつのも、このような文脈で理解できるのである。シベットは公開をはばかるこの麻薬／情報方式の一角に穴を開け、サングラスを盗んだことで抜け荷探索係の追究を受けているのだが、ライデルからこの方面の執拗さをきかさされ、相手は「強敵」 (bad news) になると覚悟をきめたのである。

のちにライデルはローウェルに向い、シベットと彼が一緒にいるところ

にロシア人が侵入してきた事情を、シベットから得た情報を介して説明して、ロシア人はシベットを拉致するに際し――

He wasn't in there on any SFPD business. He was in there on his own stick⁶⁾.

(奴はサンフランシスコ警察のご用でそこにいたんじゃない。自分の用事だけに気合が入っていたんだ。)

という事情を伝える。「人民のアヘン」ならぬ人民の麻薬／情報にふり回される人間模様がここにもある。相手にとって不足のない手強いやつは、この情報時代には「悪いニュース／情報」なのである。

ランチ・カウンターにテーブルが二つ三つといった店を指して、シベットが“a chill”（吹きさらし）というのは、いささかトマソン風のウリを身上とするサンフランシスコにあって、麻薬／情報を人に on/off しようとするときの身体論的ジェスチャーを示している。最近では Serious Chiller Lounge という形でも使われ、これは1994年6月より始まったミュンヘンを開催地とする情報イベントを指して使われており、W・バロウズの作品を展示しながら、ギブスン自身もコーディネーターとして参加している。

V

市民社会と折り合いをつけながら、どこかで異質感をただよわせているトマソンの策略は、シベットが持ち逃げした素人（情報をもたない）には実用性のないVR サングラスとつけ合わせるに、携帯電話（情報機器）を以ってしたときにも表われている。そのキーが働かないことを不審に思ったライデルとシベットの二人が調べると、内から麻薬が発見される。麻薬／情報の一体化をこれほど明示的に語るものはあるまい。その電話のもとの持主は Codes という固有名を与えられ、ヤマザキの Notebook に対比して、暗号一覧表を指す code book という一幅対が成り立つ。秘密めかして

いながらトマソンの策略に彩られている Republic of Desire の側面を暗示しているといえよう。Rowell と Codes は二人で組んで Republic of Desire のロビー活動を展開しているのである。

コンピューター・ハッカーが「陽気ないたずら者」であった時代は今や去り、「きょうびのハッカーは武装麻薬組織の殺し屋か、麻薬連合体の手先ほどの益体もないロマンティストに成り下って」いるという。ここでも麻薬とハッカー（情報機器の破壊者）との平行な関係が指示されているが、その音蒸気機関に非を唱え、その打ち壊しに精を出したラッドライトの面影はすでにない。それどころか、情報産業の Republic of Desire はサンフランシスコ再建計画のサンフラワーに肩入れし、有力な機関投資家となっている可能性もあるのである。

ロスに陣取ったショッピング・モール Century City II で、Inten Secure と Republic of Desire を対決させようとするライデルの意図の底には、中流層以上の人々が都市生活を堪能しているさなかに銃弾や死体を見せつけてやろうとする狂気に近いものがあつたのではないか。警察の共済組織 Cops in Trouble の弁護士事務所がたまたま Century City II にあるという事情もあり、シベットをメッセンジャーに仕立てあげサングラス入りの荷をそこに届けさせ、それを狙って IntenSecure が奪回を試みる際に Republic of Desire をけしかけようというのである。IntenSecure はその建物全体の警備を担当しているので、情報をそこからもち出している Warbaby 一味には、そのあたりの事情はつつ抜けとなる。Republic of Desire は Warbaby 一味を過激派として有名な、メキシコの一部地域の解放機構として州警察に通報する。銃撃戦を期待したライデルは州警察の一隊が、機械化された小型ヘリ（無線操縦）となって現われたときには失望せざるを得ない。

クリスタルといえば70年代に日本で、物質主義とミニマリズムのアップローチにおいて目立って通用したレットテルであるが、白いテニス・ウェアによそおわれたここ Century City の住人たちも、主体的に何かのムーブメントを志向することもなくポスト・クリスタルともいふべき一種のヤッピー

文化を継承しているのである。ライデルやシベットの服装がチープ・シックとか殆んどジーンズを着用しているのと対称的である。

昼はヤッピー、夜は殺人鬼という設定は、ブレット・イーストン・エリス『アメリカン・サイコ』でカタログ的に消費される殺人物語として結実したが、特注のガンが内蔵された杖をもつ Warbaby にしても、歩く冷蔵庫といわれるほどカタログの商品／情報を内に秘めている。この状態で敵対する側にカミカゼの特攻をやらせては、彼の側はひとたまりもなくなってしまふ。Century City IIで見られるのは、過激派対策として尾行・盗聴から一気に一室に封じ込めて殲滅する作戦で、Republic of Desire と警察との共同作戦の疑いがある。

War と Baby という突飛なとり合わせも、歴戦の勇士 (War) に対比してひとつひとつ武装を解除されて裸一貫 (Baby) となった姿の分裂的要素が入り混じっている。いつも眉間に皺を寄せている Warbaby には、アフリカの貿易商がサンフランシスコに押しかけてきたものの、思い余って市をとりまく〈湾〉^{ベイ}にずり落ちてゆく地殻帯の趣きがあるのである。サンフランシスコが眠った獣であるとすれば、Warbaby は目を剥いた獣である。警察に追いつめられ杖を投げ出した Warbaby はみずからの肉片をゴロンと転がしている食用獣のようでもある。バウンティ・ハンターが逆にハントされる側に回るというアメリカン・ドリームの上にあぐらをかいた零落の末路であろう。

アメリカの夢の隻影をとどめているはずの Century City II には、忌わしいローター音を響かせた警察ヘリの無双ぶりが目立ち、その拡声器からは、いわば抜身の態勢にある Warbaby 一味に抜身をすてて床に這いつくばることを命令する声がかたまる。警察に制圧された Warbaby 一味は別として、ライデルやシベットなどには弁護団により保釈が用意されており、あまつさえ芸能プロダクションの手配により映画製作のスタッフを揃えて、彼らの活動の一部始終を脚本化・映像化して売り出そうというのである。サンフラワーの仕様書を忠実に盛り込んだサングラスを保持してきた彼らが、またしても情報産業の手に落ち、物語は旧態を墨守することと

なる。我々がその旧態をクリヤーする術ははまだ示されぬままという他はない。

SFといえども「社会の変化という氷山」の水面下の「かさ」を描く点では凡百の文学と変わりなく、SF作家ギブスンの「かさ」は「巨大」で「暗い」ものだと評家（ブルース・スターリング）はいう。⁷⁾『ヴァーチャル・ライト』一巻もその「巨大」さと「暗」さを集約して読者の面前に突きつけているのである。

Notes

- 1) 原文は次の通り
2005 : Welcome to NoCal and SoCal, the uneasy sister-states of what used to be California. Here the millennium has come and gone, leaving in its wake only stunned survivors. In Los Angeles, Berry Rydell is a former armed-response lentacop now working for a bounty hunter. Chevette Washington is a bicycle messenger turned pickpocket who impulsively snatches a pair of innocent-looking sunglasses. But these are no ordinary shades. What you can see through these high-tech specs can make you rich — or get you killed. Now Berry and Chevette are on the run, zeroing in on the digitalized heart of DatAmerica, where pure information is the greatest high. And a mind can be a terrible thing to crash...
- 2) William Gibson, *Virtual Light*, (Tront, Seal book, 1993)
- 3) Gibson, p.284.
- 4) Gibson, p.244.
- 5) 榎木野衣 「切り裂きの喜劇」 (「デイヴィッド・リンチ」特集 銀星倶楽部15)
- 6) Gibson, p.303.
- 7) B. Sterling, Preface to W.Gibson's *Burning Chrome*, (London, Harper-Collins, 1988)
ウィリアム・ギブスン 『クローム襲撃』 (浅倉久志他訳 ハヤカワ文庫 <SF717>)